

SGH 通信

高知県立高知西高等学校

〒780-8052 高知県高知市鴨部 2 丁目 5 番 70 号

TEL 088-844-1221/FAX 088-844-4823

H28. No.16

URL: <http://www.kochinet.ed.jp/nishi-h/>

2017.3

～1 年生の取組～

第 28 回グローバル探究Ⅰ「地域創生モデル」クラス発表

2 月 8 日（水）の授業ではクラス発表を行いました。半年間取り組んできた独自の地域創生案が発表され、SGH 学年発表会でのクラス代表を選びました。



H28 年度 1 年生成果発表会クラス代表

H	班	発表内容
1	102	「キセイ型産業」
2	205	「高知のしょうがで健康に」～しょうがの消費量を上げ、健康志向へと変えていく～
3	306	「高知県ショウガで健康にー高知県生姜を活用した健康食品ー」
4	402	「高知のフルーツマトを使って経済面を潤すーフルーツマトを香港へー」
5	503	「高知の文旦を使って地域活性化を図る」
6	604	「高知県の産業活性化～食と六次産業～」
7	707	「観光客を増やすために ～地域活性化を目指して～」

第 29 回グローバル探究Ⅰ「地域創生モデル」学年発表会

2 月 15 日（水）の授業では、講師及び審査員に高知大学地域協働学部教授 内田純一 氏をお迎えし、代表グループが地域創生モデル案を発表しました。その結果、各賞は次のようになりました。

☆☆最優秀賞 1 H102 班 「キセイ型産業」

☆優秀賞 7 H707 班 「観光客を増やすために ～地域活性化を目指して～」

4 H402 班 「高知のフルーツマトを使って経済面を潤すーフルーツマトを香港へー」

自分達の目と耳で把握しながら課題をスタートさせ、何とかしたいという気持ちが伝わる探究活動でした。耳にしてきた事をもちいながら納得する筋立てた話ができている、仮説をたてたうえで明らかにしていく点がよかったと思います。具体的な数値で表し調査をしていたので、納得できました。

グループ活動では、意見の違う人や取り組みの仕方の違う人達と共に探究を行ってきたわけですが、今回の発表は、一年間の学び方を考えるいい機会になったと思います。熱い気持ちと冷静な考えを持つ力のある人が今後求められていますと講評頂きました。



講師 高知大学地域協働学部 教授 内田純一氏

2月22日（水）SGH成果発表会（高知県民文化ホールオレンジホールにて）

代表に選ばれた2年生5チームが、今年度探究してきた成果を発表するSGH成果発表会が開催されました。基調講演として、立教大学経営学部グローバル教育センター長の松本茂教授に「グローバルに考え、行動しよう！～土佐の先人たちを超えられるか？～」と題して、ご講演をいただきました。



○要旨

今、なぜグローバルなのか。先が読めない時代となり、世界の動きを見極めなければならない。何を、どう学ぶのか、どんな力をつけるのか、だれと行動するのか、自分の課題として今まで以上に明確にしていかなければならない。ジョン万次郎以外にも、坂本龍馬、板垣退助らは土佐のグローバル人材だ。彼らは決して海外に行ったわけではないが、世界の出来事に好奇心をもち、過去にとらわれず現実を受け入れ、自分を律するとともに他者と協力して目標に突き進むという“グローバルマインド”をもって活動した。グローバル人材とは、グローバルマインドをもち、リーダーシップ力、コミュニケーション力がある人材だ。身に付けてほしいリーダーシップ力は①率先垂範、率先して発言する。皆困っているときに行動する。②成果目標の共有、いつまでに何をするのかを明らかにして共有する、③同僚支援、である。これからは様々なことにチャレンジし、英語ができることが必要だ。英語ができればチャンスが大きく広がる。英検1級を目標にして、PICサイクルを回して貫徹精神で頑張してほしい。イチロー選手や本田選手の小学校の時に書いた作文「僕の夢」のように、ゴールを明確にし、そのために何をするのか、自分を律して、それを貫徹することが大切。

○生徒発表要旨

①「Rokuji Sangyo -The Key to activating our town-」（チーム：オーストラリア）

高知県の基幹産業である農林水産業の落ち込み、若者の県外流出を食い止めるために、私たちにできることは何であろうか。タスマニアでの企業訪問から見た高知県の活性化のカギは地域に改革を起こし、そこに携わる人の所得向上を目指すことである。企業が安全なものを作り、販売し、消費者の信頼を得、それをブランド化していくために農林水産業の六次産業化を図る必要がある。

②「藻類でアンゴラを救う」（チーム：201）

もしもスピリリナを食べたなら、あの子たちの未来はどう変わるのだろうか。現在、アフリカ中部の国々では5歳児未満の死亡率が高く、中でもアンゴラは5歳児未満の死亡率が世界一である。主な原因は、感染症によるものが多く、その改善に対してWHOやUNICEFにより予防接種、衛生指導が行われているが、それでも死亡率の大きな減少には至っていない。そこで私たちは、感染症が栄養不良から起こっている点に着目し、スピリリナを用いて改善できないかと考えた。

③「高知県に若者を呼び込むために」（チーム：509）

少子高齢化が進んできている高知県を活性化するために、私たちが目をつけたのは若い旅行者。そのために高知県の最大の強みである「食」を活かし、地元愛に溢れた旅行プランを高校生ならではの視点で提案する。

④「これからの高知の農業の可能性」（チーム：英語課題探究）

私たちは、高知県の農業の新しい方向性について探究活動を行っており、JAと農家との間で発生した問題に焦点を当て、今後の課題や対策を考えた。JAと農家がそれぞれ手を取り合い、高知県の強みである農業が、これからより発展していくようなアイデアを提案する。

⑤「Food Continuity Plan in order to Survive after Tsunamis」（高校生津波サミット出場チーム）

東北の被災地を訪問することにより、震災後、ものがなくなり、ものが動かない、仕入れにも行けない、そのような中、どのように食を確保して行ったか、仕事・住まいを求めて人口が大幅減少した町づくりはだれのためにあるのかを考えるようになった。南海トラフ巨大地震の被害想定、高知県の地理的条件や特色を考える時、津波後、自分たちの町で生き延びていくために必要となる、食の確保について提案する。

○講評 鳴門教育大学 特命教授 近森憲助 氏

問題関心、問題設定の理由、その妥当性などが非常に明確に示された発表で、高く評価できる。昨年の発表、今年の中間発表からいうと格段に内容がよくなっていて感心した。英語でプレゼンした2チームは、問題意識から、現地へ行ってのフィールドワークや先進事例を調査し、それらを高知県に適応できるように考え、課題解決案として発表していたし、また、他のチームは解決策として絵空事ではない、実現に向けた具体的な提案レベルまで達した発表をしていた。

組織行動学者のデービッド・コルブの経験学習論に「人間というのは学ぶことを通して適応を果たす唯一の生き物である」とある。生徒の皆さんは、これから多様な社会で生きるために、適応を果たさなければならない。SGHで体験したことは非常に大きな財産を一人ひとりに残したのではないか。この体験を基盤として、これからの多様化する社会の中をしっかりと生き抜いてほしい。